

母の心理 (三)

東京女高師教授

牛島義友

第三節 賢母の面 (上)

(一) 子どもの獨立

慈母の面は親の本能が直接に發露したものとすれば、賢母の面はそれを理性によつて統禦したものである。教育者としての立場、社會人としての立場、國民としての立場等からこの本能的感情を抑制したり、合理化する必要がある。この賢母の立場は家族制度、社會制度等の要求によつてとられるものである故に、この態度の正しくとれたものは賢母の譽をかち得、社會的には賞讃される。しかし自分の本來の感情を殺すものである故に、個人的には苦しい矛盾、葛藤を感じさせる。

一、心理的離乳 子供は親から獨立しなければならぬ。何事も親の手助けを要し、いつまでも親に頼る子供は獨立した人とはいえない。いつまでも母乳を吸つてゐては乳兒は成長しない。適當な時期に離乳することが必要であるが、心理的にも親から獨立することが必要である。これをホリソングラオースは心理的離乳といつてをる。

この心理的離乳は早くからそのように教育しなければならぬ。幼兒の頃はできるだけ早く自分で食事をし、一人で着物がきられ、倒れても一人で起き上るような自律の習慣をつける必要があるし、少し長ずれば一人で學校に行き、宿題を一人で處理し、或は家を離れても度はずれたホームシックにかゝらないようにさせねばならず、更に長じては自分の問題は自己の責任に於て處理し、實家や他人に頼らず一家を經營

し、更に次代の者を再生産してゆく必要がある。かく心理的離乳は凡ゆる時期に配慮されていなければならぬが、特に幼児期の自立の候、青年期の自我自覚、成人となる日の獨立が重要な問題となる。

二、過度の愛情。盲目的愛は先ず幼児の自立に失敗する。

子供が泣いたからといつて直ぐ乳をふくませず、時間を定めて授乳せよといはれる。この育児第一課でも案外に守られていない。特に農村にゆくとかゝる習慣のできてないものが八五・五%もいたと報告されている。この場合に正しい授乳をすることは大した努力を必要せず、育児について賢明な態度をもつていふことができることである。しかし問題は自分と子供との問題にあるよりも、他の家族、母や夫の間にあることが多い。そんなに赤ちやんを泣かせてはいけないとの姑や夫の言葉に若い母はつい育児の教えを破つてしまふ。子供をめぐつての嫁と姑や夫との問題は若き母の第一のトラブルであらう。故に封建的家族制度と科學的態度がこゝでは問題になる。社會の民主化と教育の善導によらねば育児の問題は解決しない。

青年期の離乳に關しては動物や過去の社會は却つて賢明であつた。動物は親の本能が停止することによつて案外賢明に離乳させている。例えば親鶏はひなが小さいうちは完全に保護をし、危険物に對しては身を犠牲にしても子供を保護し、餌なども親がさがして與える。しかしひなが大きくなると、親鶏の態度が急に變り、親が餌をたべてをるそばに寄つてく

る子供に對し、却つて嘴でつゝいて追いかける。最早親の本能は現れなくなつたのであらうが、このことによつて子供は自分で餌を探すことを覚え、獨立する。

原始社會や古代社會に於ては子供が青年期の一定の年頃になると嚴肅な成年式を行う慣習があつた。それまでは子供は母の下で、母と一緒に暮し、母の下で成長してきた。ところが、この成年式を機として、子供は母の下から引離されて大人の集團に移される。即ち式後は青年たちだけの集團生活に移り、特に夜は必ず青年の合宿で暮す。吾邦に於ても徳川時代までは庶民社會に若者入りの習慣が残つてをり、青年は必ず若者宿で寢泊りしなければならなかつた。或は武士の子供が元服式をあげると親の態度も全然異り子供は精神的に獨立せざるをえなかつた。又職人等に年期奉公の制度があるのも自ら親元からの獨立となつた。かゝる元服や成年式という社會習慣によつて過去の人々は巧みに青年期の心理的離乳を行つていた。

ところが近代社會はかゝる習慣を捨てると共に青年の心理的離乳が不完全になつてきた。

近代社會に於ては學校からの卒業や上級學校への入學が多少の成年式的影響を子弟に與えるが、過去のものに較べると問題にならず、親たちはいつまでも子供扱いにする傾向がある。特に母親はいつまでも子供のことか氣にかかり、入學試験には子供より母の方が眞剣だと噂されるくらいである。中學校の入學試験に母が附添つてゆくのは許すとしても、高校

や大學の入試にまで母がついてゆくととなると、みつともない話である。ところが昔はこんなことは絶對になかつたが、インテリといはれる近代母性に却つてみられるようになった。

故に種々の社會的慣習のすたれた近代母性は自覺的に子供の心理的離乳をはかり、又子供の親よりの離反現象に正しい心構えを持つてゐる必要がある。青年期の第二反抗期はその本質的原因は自我に覺醒せんとするためである故に、特に驚く必要はないが、青少年自身はまだ自分を自分の意思、理性で統禦することができず、従つてその反抗は譯のわからない反抗となり、常軌を逸した行動になり勝である。自分で悪いと知るともどうすることもできない氣持である。この心理については後の「母性觀の變化」に於て詳述するが、親は濫い同情と理解を以て、高い處から見守つてやる必要がある。親も子供と共に激し、感情的になることは禁物である。

青年中期以後になると、完全に自我に覺醒し、自分の考、自分の意思、理想も確立してくる。この場合、若し親の考と矛盾する時には青年は親から離れても、自分の意思を貫かうとする。かゝる場合に屢々みられる家出は新舊思想の衝突であり、舊思想は新思想を指導することはできなくなり、親の嘆きは深刻となる。

山本有三氏の「女の一生」は女の一生の中の様々の問題を取扱つた問題の人生記録であるが、最後の處では成長した青年の親からの離反の問題が取上げられている。息子が高等學校生となつて親も一安心という時に、マルクシズムに化せら

れ、家を出て遂に地下にもぐつてしまつた。この時の母の嘆きと新しい覺悟が問題となつてゐる。息子の左傾に關した父母の嘆きは、山本有三氏の「女の一生」に於て九男の左傾に關し次のように描かれている。

「何しろ若いものはひたむきですから」

「そうだ、これがいと信じてと無批判に突進するのが悪いよ。今日も教員室で話したんだが、昔は恐いものといつたら『地震、雷、火事、親父』ときまつていたものだ。しかし今日では親父なんかちつとも恐いものでも何でもなくなつてしまつた。親父はたゞふるえていただけだ。そして今の恐いものといつたら『地震、雷、火事、息子』ということになつてしまつたつて話がでたんだが、ほんとうにその通りだよ」

「今までなら、どうにかあたくしの手で導いてやれましたが、もうこうなつてくると、そういう譯にはいなくなつてしまいましたわ」

「今の若いものは向の方がずつと進んでゐると思つてゐるのだから、こつちが導こうなんてかゝると親子の間に食い違が起つてしまふのぢやないかね」(六九六頁)

子供への指導力を失つた親の嘆きは取殘されたものゝ嘆きであつて、も早親の思想、親の意見によつて引戻すことができなない。この場合感情に訴えて子供を親に引戻すことが常套手段のようである。かつて左傾學子の轉向が問題になつた頃には、最も有效な方法は母への愛情に訴へることであつた。

何も知らない母の嘆きを思うと、觀念的にのみ行動していた青年もその勇氣がくすほれたものである。しかし是が非でも息子を母に引戻し、舊思想が新思想の芽を枯らせることが正しい譯ではない。正しい新生命は健やかに成長させる必要がある。故に母への愛情に訴える方法は正しい母の態度とはいえない。母自身に新しい必要をとらせる必要がある。この場合「ゴゴリー」は「母」に於て、息子と共に歩く態度を教えている。息子の新しい思想を理解し、その正しいことを認め、母な息子と共に行動し、息子の運動に参加し、援助することを教えている。左翼運動の途中に捕はれた息子の代りに、ひそかにアジ文書を工場に運ぶというような母を描いている。しかしかゝる進歩的な母の態度は子供には望ましいことかもしれないが、世の平凡な親のとれる態度ではない。之は老ては子に従うというような單純な氣持ではなく、母自身の生命が變革し、若い生命と共感しなければならぬ。

山本有三の「母」の場合は母は母としての新しい生活を始めることを要求している。子供から見棄てられて、唯一人淋しく老いてゆくのは餘りに消極的な人間として卑屈な態度であらう。

息子の失踪、夫の死にあひ、或日兄とオーバー・ゼ・ヒルをみる。

「はじめの内は面白くみていたんですが、お母さんが年を取つて、子供たちに邪魔にされ、行くところがなくなつて養老院へはいる面になつたら、もう我慢ができなくなつたんです。

あんな意氣地のない母親つてないと思ひますわ、活動では見物の同情をひくためにお母さんが可哀そうだ、氣の毒だというように仕組んでありますけれど、あたくしは氣の毒だつて感じよりも、どうしてあのお母さんはあんなに不甲斐ないんだらうと、そればかり氣になつてたまりませんでしたわ」

老いたる母にこんな強い態度を要求するのは氣の毒なことかもしれない。しかし新生命は舊い殻を棄てるのが慣わしならば、舊生命は自ら更新しなければならぬ。

「子供は何處の家の子供だつて、みんなどういふ意味かで行つてしまふんですわ、そういつまでも母親の膝の上のつてゐるものじゃありません」

實際、子供が母親の膝の上に乗つてゐるのはお乳を飲む間だけである。乳房がしなびてしまふばどん／＼出て行つてしまふのである。いゝや、本當のことをいつたら、生れた時に既に母の體を離れてゐるのである。それから一日増し大きくなるに従つて、兩者の距離は離れてゆくばかりなのだ。生むということとは、生れるということとは、お互に離れることである。

そうだ。ある意味において離れることは生むことだ。そして母親というものは生むもの創造するものであつて、斷じてめそ／＼するもの、愚痴をいうものであつてはならない。尤男が出て行つてしまつたことは、實に堪えがたい苦痛だが、——一枚々々の肉が削がれ、骨を削られるおもいだが、それ

は一つの出産だと彼女は思つた。それによつて子は社會に生れ、母は社會に生きるのだと思つた。(八三三頁)

この母は醫者となり、一個の人間として獨立した生活を始め、女の人生の意義は單に子供を育てることだけではないことを教えている。かゝる種々の態度の中何れが正しいかは別問題として、兎角親は子供の離反に對し悲痛な經驗をしなければならぬし、母の問題の一つはこゝにあることを考えなければならぬ。

家を出る子供の場合は、子供の方が積極的に離反し、親はそれに引づられるわけであるが、娘を嫁にやる場合は親が子供を積極的に離さんとしながら、自分の中の離別の苦しみに悩むものである。

子供が結婚して新生活を始めることは親としては喜びであると共に悲しみである。特に娘が他家に嫁ぐ場合には生身が引裂かれるような淋しさを母親は感じる。女親は涙もろいものであり、子供が勉強のため家を離れる場合にすら涙を流す。しかし娘が嫁にゆくときの離別の悲しみは比較にならないものである。遊學の場合は再び自分の懐に戻つてくる望みがある。しかし嫁ぐ場合は、永遠に自分の懐には歸らぬものである。若し歸らねばならぬとすれば一層悲しい破壊の場合である。故に心理的に永遠に親から離れ、他家のものとなる淋しさに嘆くわけである。たとい同じ土地に住む場合でも母の嘆きは大きい。單純な親子の關係は斷たれ、親の愛情を今

までのように直接に表すこともできず、婚家や娘の夫に遠慮がちに振舞わねばならなくなることは母の感情としてはまさに生き別れの悲しみである。しかしこの場合娘が自分で戀人を見つけ、新家庭を持つのなら家出の場合に似たような關係であるかもしれないが、日本の母の場合は、一般には親自ら積極的に娘をかたずけたい、婚期を遅らさない中に嫁にやりたいと熱望しているだけに、この場合の感情は複雑である。即母の理性は娘を嫁にやりたいし、早く嫁にやらねばならぬと思ひ、そのために奔走してゐる譯である。然るに彼女の感情は娘を手離したくないとの感情にせめられる。この理性と感情の板ばさみになるのが日本の母の性格である。結婚のことは息子や娘自身が處理すべきものだと考えられてゐる社會に於ては母の悲しみは輕減されよう。自ら欲しないことを喜んで行はなければならぬのために日本の母は謂所餘計な苦しみをなめている。このために娘が結婚する日は重荷の降された喜の日であると共に限りなく淋しい日となつてゐる。

以上子供の獨立、心理的離乳に關して母のとらねばならぬ態度と自然の感情との間に種々の問題がみられる。立派に離乳することを世間からはせき立てられ、又子自身のためにもよいことではありながら、子供の獨立の日を單純に心から喜ぶことができないものとなつてゐる。